

新おどろき

命途生きつ果ておどろくことあつたかもし
 れ多し時不すがてしそると何もなかつた
 ふうき氣がすらし 白々おどろきの連続だ
 ちようち氣がする つまやすまに事付あし
 うの子牙はくすでもふんのた
 日月こころは流れまをそんちことと思つた
 出の申そのなものだと思つていふ つまや
 ありあり聞かすのた
 しおしそくも言つていふんあふのころの二

エーズは 緩想通達だ それが実証するまじ

さえ網絡いかなるのた それを元は不慮もす
 午まし念我を改意しあり 緩想通達での互解を
 すまし二とろしに ちどろいふのけりままで
 ちかてふれのせりわ 自知通達と同一と存した

今舞新らしくまどろい ちのけりは年神者の唱加
 だ 世日月交又事業者へのま知る世が来た
 内容に幕屋の 何れなく年亡の人の人物をか
 ぞえら 弘より一十六才の年亡の人が何人もた

号数の創意は百年だ 学校に守りし一人の名

がのつたりる 百三十人申すは
 一千年二百人の考致が年にお百三十人いる
 何ともしこのごろ長生の人が多いと聞かうい
 太二はを欠く不どろい太
 しかも穿付しこゆる
 年よりか多くは国の埒滞は委玄理
 若い人の減少より幼少の年よりの増和をど
 うするに
 手の上一回の総理やあうに不どろきか奇かし
 に妻の太

私もその一人だ